みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

在日外国人が変える日本語教育、そして日本

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 庄司, 博史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5542

季刊ジャネット
Ja-Net

No.32 2005年1月25日発行

●View from the Other Side 3
●あちこち日本語ご紹介
［埼玉県　富士見市・上福岡市・大井町・三芳町］..... 4
●あちこち日本語ご紹介
［イタリア　サン・ジョヴァンニ・ヴァルダルノ］..... 5
●教材紹介
『初級日本語文法と教え方のポイント』..... 6
『日本語文法演習（上級）ことがらの関係を表す表現 - 複文 - 』..... 6
『やってみよう「参加型学習」！
日本語教室のための４つの手法～理念と実践～』..... 7
『開かれた日本語教育の扉』..... 7
●なんでも情報BOX 8

Ja-NetはJapanese Networkの略です。「にほんご」を通して編集室と読者の皆様を結ぶ情報誌にしたいと考えています。

スリーエーネットワーク

巻頭寄稿

在日外国人が変える日本語教育、そして日本

◆ 国立民族学博物館 民族社会研究部教授
庄司　博史

在日外国人のもたらした社会の変化

2004年春、国立民族学博物館(民博)において、特別展「多みんぞくニホン―在日外国人のくらし―」が開催された。それを発案、企画したわたしの主な目的は次の２点であった。ひとつは、20年来急速に多民族化した日本の現状を、外国人コミュニティーと日本社会のさまざまな変化を通じて実感すること。ふたつめは、これからも日本が多民族化することを前提に、ますます必要とされる共生への自覚を喚起することであった。

この特別展示をほかならぬ民博で計画したのは、今まで外の民族に関心を持ち続けてきた文化人類学こそ、足元の多民族化、すなわちわれわれ自身に目を向けるべきという意義を感じたからである。結果として人類学にいかほどのインパクトを与えたか定かではないが、多くの来館者からは、はじめて日本の多民族化がここまで進んでいることを知ったという感想を得ることができた。

確かに、現在われわれの周囲では、外国人増加にともなう多くの変化が起こりつつある。外国人との接触が日常化しただけではない、エスニックショップや外国人集住都市の出現など20年前には想像もつかなかったことも多い。特に外国人とともに持ち込まれた外国語は日本の言語状況を変えつつある。今や外国人の多く住む自治体では外国語による多様な情報が用意され、外国人のための新聞雑誌などの出版活動をはじめ商店の広告、交通機関の案内も多言語化されるのはめずらしくなくなった。

国内で発行されている外国語による新聞・雑誌は、現在200タイトルに及ぶ。

しかし、その影響は外国語使用のみにとどまらず日本語の世界にも及んでいる。語彙や文法、発音、さらに文体への影響は当然あるがここでは、外国人に対する日本語教育、特に日本語支援について考えたい。

変わる日本語教育

４、50年前まで、日本語が外国人によって話されるなどというのは奇妙なことであった。日本びいきの研究者が、まれに日本語を話したりすれば、こころの底をのぞかれているようで、不安さえおぼえたものだ。70年代以降、経済成長とともに状況が一転し、海外では日本語へ興味が向きはじめる。海外の多くの大学に日本語学科が新設され、一般向けの日本語教室も繁盛しはじめた。

かくして外国人への日本語教育を通じ、日本語も輸出品目のひとつとなった。国力増強とともに政府も国家的事業として日本語普及に力を入れてきた。同時に普及の対象であったのが茶道や生け花など「日本文化」であった。海外では日本の経済進出にやたら風当たりが強かっただけ、日本語と抱き合わせで紹介する日本文化がその緩衝材となるとの思惑もあっただろう。実際、日本語教育は日本文化紹介の使命も帯びた時期があった。日常の習慣から、果ては禅や歌舞伎などおよそ普通の日本人には縁のない世界まで、日本から送られてくる教科書や副読本にはあふれていた。

いずれにせよ、外国人への日本語教育は外向けのものであった。日本で日本語を学ぶ外国人の多くも留学生で、いずれ本国にもどる人々であった。そこでも文化の抱き合わせ教育は続

く。外国人留学生との交流は、和服やはっぴを着せ、茶室に座らせて茶をすすらせるか、筆を持たせて習字をさせ、日本文化を教えるものと決まっていた。

在日外国人への日本語教室

しかし、現在、日本語教育をめぐる事情はさらに大きく変わっている。学習や実社会での実践的な日本語運用能力を必要とする留学生、就学生は17万人にものぼるという。かれら自身日本の多民族社会の重要な構成メンバーであり、かれらとの日常の接触のなかで、肩肘をはらずにつきあいのできる日本人も増えた。

なにより変わったのは、留学生でも就学生でもない外国人が日本語を学びはじめたことだ。多くは、いわゆる中国帰国者、難民、南米からの日系人たちとその同伴・呼び寄せ家族、あるいは日本人との結婚で来日した人々などである。わたしたちのごく身近に住み、そして働きながらも、費用や資格や時間の面で留学生のように日本語学習に全力を投じることができない人々である。到着したその日から実社会で生活しながら、日本語が壁となり、どれだけ不自由をしてきたか、ここでくりかえす必要はないであろう。

かれらに手を差しのべたのが、今や日本中いたるところでボランティアを中心に活動している日本語教室である。自治体やNGOから場所など支援を受けているものもあるが、まったく自前で行っているものもめずらしくない。日本語学校や大学での本格的な日本語教育と区別するため、日本語支援と呼ばれはじめているが、事実いくつか特徴がある。

日本語支援では、実生活で即戦力となる日本語が要求されることはもちろんであるが、教え方、教材、そして指導者の資格や技術も基本的に非専門的という面もある。しかし、わたしがなにより注目しているのは、たずさわる人々の多様性、そして民衆を基盤にする末広がりの構造とそれが持つ可能性だ。

支援者にはてっとり早い国際交流という動機ではじめた人も多いだろう。あるいは日本語の知識を生かすため、あるいは純粋に外国人支援を目的とする人も少なくないはずだ。いずれにせよ、日本語支援を通じて多くの日本人が外国人と、それもずっと身近なレベルでつきあっていることになる。インターネットの検索でも、日本全国に大小無数の日本語教室が活動しているのがわかる。日本語支援を支える日本語教材が多数出版されはじめていることもそれを語っている。

日本語支援者の役割

日本語支援という行為は外国人への単なる一方的な日本語能力指導ではない。外国人が支援者を通じ、さまざまな生活情報や日本人についてより深く知る機会を得ることができるのはいうまでもない。しかし、日本人も外国人と接触し、多くのことを学んでいるはずだ。単に外国やその文化についての知識ではない。むしろ外国人とつきあい、かれらとコミュニケーションの成立を体験することで、われわれにしみつき、われわれを拘束していた外国人観が大きく影響を受けていると思われる。おそらく日本全国で活動する何万人もの日本語支援者の貴重な経験は、日本人の外国人に対する他者意識を変えていくひとつの要因になろう。

ブラジル人学校の小学生たち。（茨城県水海道市）現在日本には、北関東を中心に約30のブラジル人学校が存在する。（写真：掛札綾）

支援者のなかにはかつての、大学、日本語学校は専門職、一般向けはボランティアという構図をくつがえすほどの経験や高度な技術をそなえた人がいる。と同時に、はじめたばかりで、技術、知識の点で十分でない人もいる。しかしこの人々の存在が地域の一般民衆と日本語支援者とをつないでいることこそ重要である。かつての留学生との交流と比較すればよい。留学生もそれにかかわる人々ともどちらかというと社会の恵まれたクラスに属していた。両者ともある意味では国の代表としての気概と自負を持っていたはずだ。これに対し、日本語教室は学ぶほうも支援者も地域の住民としてかかわりあえる点、はるかに共生社会に近いところにあるといえる。

外国人が崩す「閉ざされた日本語」

日本語は今まで日本人にとっても、意識のうえの壁であった。日本語は長く、まれな才能を持ちあわせた外国人以外、縁のないものであった。少なくともそう思えた。世界一難解な日本語が日本のこころをまもり、日本人たらしめているとさえみえた。外国人のへたな日本語は逆にわれわれを安心させ、満足させた。われわれが外国語を学べないように、外国人も学べないのは当然のことであった。ことばの壁に隔てられた別世界、梅棹忠夫のいう「閉ざされた日本語」の世界にわれわれは安住できたのである。しかし今、日本語を流暢に話せる外国人はめずらしいことではない。ごく普通の外国人が日本語を話すことでやっと日本語も普通のことばのひとつとなれたのである。この壁を乗り越えてこそ、自分たちのことばへの反省があり、今やっとめばえてきた「やさしい日本語」への視点がある。底辺からそれを支えてきた日本語教室が果たした役割は小さいものではない。

今、在日外国人の登録数は200万人に近づきつつある。人口の1.5%である。この数が日本社会の多民族化という観点からみて大きいかどうかはさまざまな評価はあろう。しかし、この数が国民国家日本を演出し、また型にはめてきた役者日本語の役回りを変えつつあることは確かなようだ。

庄司博史（しょうじひろし）
国立民族学博物館　民族社会研究部教授。専門分野は言語学、ウラル語学、言語政策論。現在は日本の多民族化・多言語化の実態についての研究を進めている。『多みんぞくニホン — 在日外国人のくらし』（千里文化財団）、『ことばの二〇世紀』(ドメス出版)ほか、著書・論文多数。